

論文要旨

中国人上級日本語学習者における間接発話行為の理解 に関する研究 —不同意発話行為を中心に—

広島大学大学院 教育学研究科
文化教育開発専攻 日本語教育学

D142539 張麗

I 論文の構成

第1章 序論

- 1.1 本研究の背景と問題の所在
- 1.2 本研究の目的と意義
- 1.3 本論文の構成

第2章 間接発話行為の理解に関する先行研究

- 2.1 間接発話行為の理解に関する理論的な先行研究
 - 2.1.1 間接発話行為の定義
 - 2.1.2 間接発話行為の慣習性の定義と認定基準
 - 2.1.3 間接発話行為の理解に必要な要素
- 2.2 慣習性が母語話者の間接発話行為の理解に与える影響
- 2.3 慣習性が学習者の間接発話行為の理解に与える影響
 - 2.3.1 英語を目標言語とする場合
 - 2.3.2 日本語を目標言語とする場合
 - 2.3.3 中国語を目標言語とする場合
 - 2.3.4 先行研究の結果に対する考察
- 2.4 学習者の間接発話行為の理解プロセスに関する研究
 - 2.4.1 理解に使用するストラテジーについて
 - 2.4.2 理解が困難となる原因について
- 2.5 先行研究から得られた知見と残された課題

第3章 日中両言語における間接不同意発話行為の慣習性について

- 3.1 不同意発話行為に関する先行研究
- 3.2 日中両言語の間接不同意発話行為の慣習性に関する調査
 - 3.2.1 間接不同意発話行為の慣習性を判断する方法
 - 3.2.2 予備調査
 - 3.2.3 本調査
- 3.3 結果-日本語の間接不同意発話行為の慣習性の特徴
 - 3.3.1 日本語の慣習的間接不同意発話行為の特徴

- 3.3.2 日本語の非慣習的間接不同意発話行為の特徴
- 3.4 結果-中国語の間接不同意発話行為の慣習性の特徴
 - 3.4.1 中国語の慣習的間接不同意発話行為の特徴
 - 3.4.2 中国語の非慣習的間接不同意発話行為の特徴
- 3.5 比較-日中両言語における間接不同意発話行為の特徴
 - 3.5.1 比較-日中両言語における慣習的間接不同意発話行為の特徴
 - 3.5.2 比較-日中両言語における非慣習的間接不同意発話行為の特徴
- 3.6 本章のまとめ

第4章 日本語の慣習性が学習者の間接発話行為の理解に与える影響

- 4.1 調査材料の作成
- 4.2 調査方法の作成-語用論聴解テスト
- 4.3 日本語母語話者を対象とする予備調査
 - 4.3.1 調査目的
 - 4.3.2 調査対象者
 - 4.3.3 調査方法と調査の手続き
 - 4.3.4 分析方法
 - 4.3.5 分析結果
 - 4.3.6 予備調査のまとめ
- 4.4 中国人上級日本語学習者を対象とする本調査
 - 4.4.1 調査目的
 - 4.4.2 調査対象者
 - 4.4.3 調査方法
 - 4.4.4 分析
 - 4.4.5 結果と考察
- 4.5 本章のまとめ

第5章 学習者の間接発話行為の理解プロセスについての検討

- 5.1 調査目的
- 5.2 調査対象者

5.3 調査方法

5.4 データ

5.5 学習者が間接発話行為を理解する際に使用する文脈情報

5.5.1 文脈情報の分析の枠組み

5.5.2 分析手続き

5.5.3 分析結果

5.6 学習者の理解を困難にする原因

5.6.1 慣習的間接不同意発話行為の理解を困難にする理由

5.6.2 非慣習的間接不同意発話行為の理解を困難にする理由

5.7 本章のまとめ

第6章 総合考察

6.1 結果のまとめ

6.1.1 日中両言語における間接不同意発話行為の慣習性の特徴

6.1.2 慣習性が間接不同意発話行為の理解の正確さと速さに与える影響

6.1.3 慣習性の違いと間接不同意発話行為の理解に使用される文脈情報

6.2 考察

6.2.1 慣習性が間接不同意発話行為の理解の正確さに与える影響

6.2.2 慣習性が間接不同意発話行為の理解の速さに与える影響

第7章 結論と今後の課題

7.1 結論

7.2 教育的示唆

7.3 今後の課題

参考文献

補助資料

Ⅱ 論文要旨

第 1 章 序論

1.1 本研究の背景と問題の所在

間接発話行為は、発話行為を行う際に慣習的に用いられる言語形式であり、意味構造の有無によって、慣習的間接発話行為と非慣習的間接発話行為に分類される。前者は特定の言語形式と意味構造を利用することで話者の意図が理解でき、慣習性が高い。一方、後者は、複数の意味の解釈が可能であり、特定の文脈に依存して初めて話者の意図が特定できるため、慣習性が低い。そのため、非慣習的間接発話行為は、慣習的間接発話行為より推論の負担が大きいと言われている (Burnett, 2015; Taguchi, 2005)。

慣習性が学習者の間接発話行為の理解に与える影響について、先行研究では一致した見解が得られていない (Cook & Liddicoat, 2002; Taguchi, 2005, 2008; 萩原, 2006; Taguchi, Li & Liu, 2013)。先行研究の結果が一致しないのは、先行研究ではいくつかの問題点があるためであり、これらの問題を解決する形で再検討する必要がある。また、慣習性が学習者の間接発話行為の理解に影響を与える原因を明らかにするために、学習者の間接発話行為の理解プロセスについて検討する必要がある。さらに、学習者の間接発話行為の理解に困難が生じる原因について、慣習性の違いによって異なる可能性があり、理解に支障をきたす文脈情報の特徴を検討する必要がある。

1.2 本研究の目的と意義

本研究では、慣習性が学習者の間接発話行為の理解に与える影響について再検討する。加えて、慣習性の違いによって、学習者が間接発話行為を理解する際に使用する文脈情報の特徴及び理解に支障をきたす文脈情報の特徴を解明することを目的とする。本研究の検討を通して、学習者の間接発話行為の理解に慣習性が与える影響について新たな知見を提供することができる。

1.3 本論文の構成

本論文は全 7 章で構成される。第 1, 2 章で、本研究の背景と、先行研究を考察し、本研究の課題を提示する。第 3 章では、日中両言語の間接不同意発話行為の慣

習性の特徴を明らかにする。第 4 章では、慣習性が中国人上級日本語学習者の間接発話行為の理解に与える影響を検討する。第 5 章では、中国人上級日本語学習者の間接発話行為の理解過程を探る。第 6 章では、慣習性が間接発話行為の理解に与える影響について考察を行なう。第 7 章では、本研究で得られた知見に基づき、学習者の間接発話行為の理解を促進する教育的示唆及び今後の課題を述べる。

第 2 章 間接発話行為の理解に関する先行研究

2.1 間接発話行為に関する理論的な先行研究

間接発話行為は、Searle (1975) が提唱した概念であり、一つの発語内効力を遂行することによって、もう一つの別の発語内効力が遂行される発話行為を意味する。間接発話行為は、発話行為を行う際に慣習的に用いられる言語形式や意味構造の有無によって、慣習的間接発話行為と非慣習的間接発話行為に分類される。慣習的間接発話行為は、特定の言語形式と意味構造が用いられるため、慣習性が高い。一方、非慣習的間接発話行為は、特定の言語形式や意味構造が使用されておらず、文脈によって意味が変わるため、慣習性が低い。Gibbs (1986), Holtgraves (1999), Edmonds (2014), Burnett (2015) では、異なる手法を用いて、間接発話行為の慣習性の程度を判断しているが、文脈の中で母語話者が特定の発話行為を伝達するために使用される言語形式についての実態調査 (Burnett, 2015; Edmonds, 2014; Gibbs, 1986) が必要だと考えられる。また、反応時間を用いて、より厳密的な慣習性の判断を行なったケースもある (Gibbs, 1986; Holtgraves, 1999)。

2.2 慣習性が母語話者の間接発話行為の理解に与える影響

母語話者の理解に対する慣習性の影響を調べた Gibbs (1986), Holtgraves (1999) の研究結果では、母語話者にとって、慣習的間接発話行為では、字義通りの意味からの推論が省略できるため、非慣習的間接発話行為より反応が速かった。母語話者は、言語慣習に関する知識を使用することで慣習的間接発話行為における話者の意図を読み取るのに対し、非慣習的間接発話行為では、様々な文脈情報を使用し、字義通りの意味から話者の意図を推測する必要があると考えられる。

2.3 慣習性が学習者の間接発話行為の理解に与える影響

慣習性が学習者の間接発話行為の理解に与える影響を調査した研究では、慣習

的間接発話行為が非慣習的間接発話行為より理解されやすいという結果 (Cook & Liddicoat, 2002; Taguchi, 2005) とそうでない結果 (Taguchi, 2008; Taguchi, Li & Liu, 2013) が得られている。先行研究において異なる結果となった原因について、次のような問題点があると考えられる。第 1 に、先行研究で用いられた慣習性の判断の仕方には妥当性を疑問視せざるを得ないものがある。第 2 に、調査対象者の母語が多様であるにもかかわらず、分析では考慮されていない。第 3 に、研究間で間接発話行為の慣習性が異なる上に、間接発話行為のタイプも異なる。第 4 に、日本語や中国語を目標言語とする研究では、初中級の学習者を対象としているが、語用論的理解の調査にはより習熟度の高い学習者を対象とすべきである。最後に、目標言語の文化背景が異なるため、慣習的間接発話行為の明示性においても差異がある。間接発話行為の理解を検討するには、これらの問題点を改善する必要がある。

2.4 学習者の間接発話行為の理解プロセスに関する研究

Taguchi (2002), Lee (2010) は、内省インタビューや発話思考法を用いて学習者の理解過程について調査した。その結果、学習者が間接発話行為を理解する際に使用ストラテジーの特徴が見られた。しかし、これらの研究では、学習者が使用するストラテジーの特徴を慣習性の違いの観点から分析していない。また、主に正確に答えた項目を対象とした考察であるため、正確に理解できなかった項目の原因については言及されていない。Kasper (1984), Cook & Liddicoat (2002) は、学習者が間接発話行為を理解できないのは、学習者がボトムアップ処理に依存しすぎるためであると推察している。しかし、この指摘は、ロールプレイや選択問題を用いて学習者の理解を調査した結果に基づいた推測であり、直接理解過程を見たものではない。

2.5 先行研究から得られた知見と残された課題

以上の先行研究により、間接発話行為の慣習性が学習者の理解の正確さと速さに影響を与えることと、文脈情報の使用が不十分であることが学習者の間接発話行為の理解を困難にする可能性が示唆された。しかし、先行研究には多くの問題点があるため、慣習性が間接発話行為の理解に与える影響については、一致した見解が得られておらず、先行研究の結果を比較することが困難である。そこで、本研究

ではこれらの問題を解決し、以下の3つの課題を設定する。

- 研究課題（1） 日中両言語における間接不同意発話行為の慣習性にはどのような特徴があるのか。
- 研究課題（2） 日本語の間接不同意発話行為の慣習性が中国人上級日本語学習者の理解の正確さと速さにどのような影響を与えるのか。
- 研究課題（3） 中国人上級日本語学習者は、慣習的間接不同意発話行為と非慣習的間接不同意発話行為を理解するために、どのような文脈情報を使用するのか。どのような文脈情報が使用できないことで理解に困難が生じるのか。

第3章 日中両言語における間接不同意発話行為の慣習性について

3.1 不同意発話行為に関する先行研究

日本語では不同意発話行為として多くの方略が使用されているが、1種類の機能的要素を使用する頻度が高く、主要部先行型が多いという特徴が顕著である。このことから、日本語の間接不同意発話行為には慣習的間接不同意発話行為と非慣習的間接不同意発話行為が存在することが示唆される。しかし、間接不同意発話行為の慣習性に関する検討はなされておらず、日本語の不同意発話行為の慣習性の特徴は不明である。学習者は母語の知識を使用し、目標言語を理解する可能性がある（Koike, 1996）ため、日本語の間接不同意発話行為の慣習性が中国人日本語学習者の理解に与える影響を検討するためには、学習者の母語である中国語の不同意発話行為の慣習性についても検討する必要がある。

3.2 日中両言語の間接不同意発話行為の慣習性に関する調査

本研究では、間接不同意発話行為の慣習性を判断するために、Gibbs（1986）、Edmonds（2014）を参考に談話完成テストを用いた。調査協力者は、中国語母語話者22名、日本語母語話者22名であった。収集したデータを倉田・楊（2010）、堀田・吉本（2013）、ピナンソッティクン（2014）を参考に、不同意発話行為を「不同意前」、「不同意の主要部」、「不同意後」の3つに分類した。慣習的間接不同意発話行為を抽出する際に、「不同意の主要部」を中心に分析した。Edmonds（2014）を参考に、コーディングした機能的要素から、25%以上使用されているものを抽出

し、それらの機能的要素の中で 50%以上使用された言語形式を抽出した。また、母語話者の発話から使用頻度が 10%以下のもので、様々な意味が読み取れ、多様な文脈情報を使用して初めて理解可能な発話を非慣習的間接不同意発話行為とした。

3.3 結果－日本語の間接不同意発話行為の慣習性の特徴

日本語の慣習的間接不同意発話行為として、機能的要素の使用頻度が高かったのは、「否定理由」、「代案」、「代案理由」であった。「否定理由」として使用される言語形式には「～はちょっと…」,「～はちょっと高い」,「～はちょっと難しいかもしれません」,「～はちょっと苦手」,「～は手間がかかる」等の否定的な表現、新たな前提を追加する言語形式「新たな情報＋のです」が使用されていた。「代案」として使用された言語形式には、「～の方がいいんじゃないですか」,「～しませんか」,「～の方がいいんじゃないかなと思います」等があった。日本語の非慣習的間接不同意発話行為として、「躊躇を示す保留表現」,「相手の話を繰り返して質問する表現」,「共通認識を定めるための背景知識（一般常識あるいは個人経験）を提示する表現」が抽出された。

3.4 結果－中国語の間接不同意発話行為の慣習性の特徴

中国語の慣習的間接不同意発話行為として、機能的要素の使用頻度が高かったのは、「否定理由」、「代案」、「代案理由」であった。「否定理由」として使われている言語形式には、否定的な態度を示す動詞「我担心～（「～と心配していますが）」,「我不太喜欢～（「あまり好きではないですが）」」があった。また、日本語と同じように、否定的な形容詞や副詞「～很・太～（～すぎる）」,「～没有新意～（新規性がない）」が使用されることがわかった。「代案」として使われている言語形式は、「我们还是～（～しませんか・の方がいいと思います）」,「我觉得只～就可以（～だけでいいと思います）」であった。「代案理由」に使われた形式は、「～又～又（～も～も）」,「～更+积极色彩的词汇（もっと+積極的な評価）」であった。非慣習的間接不同意発話行為として、「共通認識を定めるための背景知識（一般常識あるいは個人経験）を提示する表現」,「提案に対する相手の態度について質問する表現」,「さらなる検討の必要性を示す表現」,「相手に対する皮肉を示す表現」が抽出され

た。

3.5 比較一日中両言語における間接不同意発話行為の特徴

日中両言語における慣習的間接不同意発話行為として、共に「否定理由」、「代案」、「代案理由」が使用され、それぞれが使用する言語形式に類似点があることがわかった。ただし、場面によって、日中両言語の機能的要素の使用頻度には偏りがあった。集団のために議論する際、中国語はより「目的達成志向」であり、日本語はより「対人関係配慮志向」であると言える。個人のために議論する場合、中国語はより「対人関係配慮志向」であり、日本語はより「目的達成志向」であることがわかった。

日中両言語における非慣習的間接不同意発話行為として、「共通認識を定めるための背景知識を提示する表現」が多用されていた。中国語では、「個人経験」より「一般常識」を用いて相手を説得する傾向があり、「一般常識」が「個人経験」より説得力があることが示唆された。これに対し、日本語では、「個人経験」と「一般常識」は同等に効果的な説得方法であった。また、日本語は中国語より、相手の提案との関連性の表し方が曖昧である傾向が見られた。

第4章 日本語の慣習性が学習者の間接発話行為の理解に与える影響

4.1 材料の作成

次の条件を基に、ターゲットを選定した。

- (1) 機能的要素の全体的な頻度及び言語形式のバリエーションに配慮する。
- (2) 日中両言語の間接不同意発話行為の類似点と相違点に配慮する。

4.2 調査方法の作成-語用論聴解テスト

4.1 で選定した慣習的間接不同意発話行為と非慣習的間接不同意発話行為を談話完成テストに埋め込み、13 場面の計 26 項目の不同意発話行為をターゲット項目として設定した計 66 項目の語用論聴解テストを作成した。

4.3 日本語母語話者を対象とする予備調査

日本語母語話者 29 名を対象とし、4.2 で作成した語用論聴解テストを用いて、予備調査を行なった。調査結果から、第 3 章で抽出した慣習的間接不同意発話行為と非慣習的間接不同意発話行為のうち、4 項目以外の 22 項目が妥当と判断され

た。日本語母語話者にとって、慣習的間接不同意発話行為が非慣習的間接不同意発話行為より反応が速いことがわかった。

4.4 中国人上級日本語学習者を対象とする本調査

中国で日本語を学習している JFL 日本語学習者 24 名を対象に、22 項目をターゲットとする語用論聴解テストを用いた。その結果、慣習的間接不同意発話行為は非慣習的間接不同意発話行為より理解得点が高く、反応時間が短いことがわかった。このことから、上級学習者の間接発話行為の理解における慣習性の影響は普遍的である可能性が示唆された。

第 5 章 学習者の間接発話行為の理解プロセスについての検討

5.1 調査目的

中国人上級日本語学習者は日本語の慣習的間接不同意発話行為と非慣習的間接不同意発話行為の理解過程において、どのような文脈情報を使用するのか、そして、どのような文脈情報が使用できないことが、理解に支障をきたす原因となるかを明らかにすることを目的とした。

5.2 調査対象者

調査対象者は語用論聴解テストに参加した学習者 24 名であった。

5.3 調査方法

調査対象者が語用論聴解テストを終えた後に、再度ターゲット項目を提示し、その後に、「Yes/No のどちらを選択したか、なぜそれを選んだか」について発話することを求める刺激再生法を用いた。

5.4 データ

収集したデータは、刺激再生法で得られた 528 回であった。

5.5 学習者が間接発話行為を理解する際に使用する文脈情報

Taguchi (2002) の文脈情報の分類枠組みを参考に、学習者の全ての発話データをコーディングした。次に、学習者の発話から、正答と判断した項目について、慣習的間接不同意発話行為と非慣習的間接不同意発話行為の文脈情報、それぞれの特徴をまとめた。その結果、慣習的間接不同意発話行為でも非慣習的間接不同意発話行為でも、「キーワード」の使用数が最も多いことがわかった。これに対し、非

慣習的間接不同意発話行為では、慣習的間接不同意発話行為より理解に用いる文脈情報の種類が多く、「キーワード」が 37%、「背景知識」が 36%、「パラ言語情報」が 17%、「話者の意図」が 6%であった。

5.6 学習者の理解を困難にする原因

慣習的間接発話行為の理解を誤ったのは、「キーワード」をうまく利用できないためであると考えられる。一方、非慣習的間接不同意行為の理解に間違いが生じた原因は、学習者と母語話者では「パラ言語情報」、「談話状況」、「話者の意図」や「背景知識」がずれていることを学習者が把握できていないからであることがわかった。

第6章 総合考察

6.1 結果のまとめ

- (1) 日中両言語において、慣習的間接不同意発話行為では、「否定理由」、「代案」、「代案理由」が使用される。場面によっては、意味構造の使用頻度に偏りがある。非慣習的間接不同意発話行為において、日中両言語では、「共通認識を定めるための背景知識を提示する表現」が使用される点で一致するが、「躊躇を示す保留表現」、「相手の話を繰り返し質問する表現」は中国語で使用されない。
- (2) 中国人上級日本語学習者は、慣習的間接不同意発話行為の方が非慣習的間接不同意発話行為より理解得点が高く、反応が速い。
- (3) 学習者は、慣習的間接不同意発話行為を理解する際、主に「キーワード」と「背景知識」を使用する。一方、非慣習的間接不同意発話行為を理解する際には、「キーワード」、「背景知識」、「パラ言語情報」、「話者の意図」、「談話状況」を使用する。学習者の理解を困難にする原因について、慣習的間接不同意発話行為では、主に「キーワード」をうまく利用できないことが原因だと考えられる。非慣習的間接不同意発話行為の場合、学習者の目標言語に関する「背景知識」、「パラ言語情報」と母語話者の知識がずれており、学習者がそれを把握していないため、誤解が生じると考えられる。

6.2 考察

慣習的間接発話行為が非慣習的間接発話行為より理解されやすいのは、上級学習者の場合、言語慣習と発話内効力の連結関係を利用することができるためである。また、学習者が母語の知識を使用し第二言語の理解を促進する可能性が示唆された。これに対し、非慣習的間接不同意発話行為の場合は、中国人上級日本語学習者であっても、それらを字義通りの意味として理解することがある。

慣習的間接発話行為が非慣習的間接発話行為より理解が速いのは、「キーワード」に関する知識さえあれば、慣習的間接不同意発話行為を直接理解することができ、字義通りの意味から話者の意図を推論するプロセスが短縮されうるためである。一方、非慣習的間接不同意発話行為では、「キーワード」だけではなく、「背景知識」、「パラ言語情報」、「談話状況」、「話者の意図」などの文脈情報を用いて、発話の字義通りの意味とこれらの情報とを照らし合わせて、さまざまな推論を行う必要があるため、処理負荷が高く、反応時間がかかったと考えられる。また、日中両言語では、慣習的間接不同意発話行為については、類似点が多いが、非慣習的間接不同意発話行為については、相違点が多く、このことも理解速度に影響した可能性がある。

第7章 結論と今後の課題

7.1 結論

本研究の分析を通して、中国人上級日本語学習者が日本語の間接不同意発話行為を理解する場合、慣習的間接不同意発話行為が非慣習的間接不同意発話行為より理解の得点が高く、反応が速くなることがわかった。中国人日本語学習者は、慣習的間接不同意発話行為と非慣習的間接不同意発話行為を理解する際、性質の異なる文脈情報を使用するため、慣習的間接不同意発話行為の方が非慣習的間接不同意発話行為より推論プロセスの短縮ができると考えられる。よって、間接発話行為の理解に困難をもたらす原因も慣習的か否かによって異なることが示唆された。

7.2 教育的示唆

- (1) JFL 環境の学習者における慣習的間接不同意発話行為の理解を促進するためには、語彙能力や聴解能力を高めるとともに、たとえ、馴染みのない語彙や聞き取りにくい音声環境であっても、会話の状況と合わせて、相手の発話の

中に出てきた「キーワード」を掴むことができる能力を養う指導を行う必要があると考える。

- (2) 非慣習的間接発話行為の理解を促進するためには、学習者に当該発話行為を含む多数の自然な会話場면을提示し、学習者の想定と目標言語の知識の間どのようなギャップがあるかに気づかせることが重要である。

7.3 今後の課題

- (1) 研究対象と調査対象者の限界

慣習性の影響や間接発話行為の理解を阻害する原因について更に検討するためには、他の発話行為を用いた検討も必要である。特にコンテクスト度が低い文化に属する言語を母語とする上級学習者を対象とする必要がある。

- (2) 方法論に関する問題点と課題

調査方法を改善し、より厳密な反応時間の測定方法を用いて検討する。学習者にとって馴染みのある語彙を用いて、慣習的間接発話行為の理解を困難にする原因を追求する必要がある。

- (3) 学習者の誤答例の分析の限界

今後、さらに多くの誤用例を収集・分析し、本研究で見出された知見の普遍性を高めていく必要がある。

参考文献

- Burnett, D. L. (2015). Exploring the role of conventionality in children's interpretation of ironic remarks. *Journal of Child Language*, 42, 1267-1288.
- Cook, M., & Liddicoat, A. J. (2002). The development of comprehension in interlanguage pragmatics: The case of request strategies in English. *Australian Review of Applied Linguistics*, 25, 19-39.
- Edmonds, A. (2014). Conventional expressions: Investigating pragmatics and processing. *Studies in Second Language Acquisition*, 36, 66-99.
- Gibbs, R. W. (1986). What makes some indirect speech acts conventional? *Journal of Memory and Language*, 25, 181-196.
- Holtgraves, T. (1999). Comprehending indirect replies: when and how are they conveyed

- meanings activated? *Journal of Memory and Language*, 41, 519-540.
- Lee, C. (2010). An exploratory study of the interlanguage pragmatic comprehension of young learners of English. *Pragmatics*, 20, 343-373.
- Searle, J. (1975). Indirect speech acts. In P. Cole & J. Morgan (Eds.), *Syntax and semantics* 3.: *Speech acts* (pp. 59-82). New York: Academic Press.
- Taguchi, N. (2002). An application of relevance theory to the analysis of L2 interpretation processes: The comprehension of indirect replies. *International Review of Applied Linguistics*, 40, 151-176.
- Taguchi, N. (2005). Comprehending implied meaning in English as a foreign language. *Modern Language Journal*, 89, 543-562.
- Taguchi, N. (2008). Pragmatic comprehension in Japanese as a foreign language. *Modern Language Journal*, 92, 558-576.
- Taguchi, N., Li, S., & Liu, Y. (2013). Comprehension of conversational implicature in L2 Chinese. *Pragmatic & Cognition*, 21(1), 139-157.
- 倉田芳弥・楊虹 (2010) 「討論における中国人学習者と日本語母語話者の不同意表明の仕方：構成要素の観点から」『言語文化と日本語教育』39, 158-161.
- 萩原明子 (2006) 「日本語での発話理解：第二言語話者と母語話者」『東京薬科大学研究紀要』9, 57-64.
- 堀田智子・吉本啓 (2013) 「中国人日本語学習者の「不同意」行為—構成要素と発話の連鎖の考察—」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』8, 39-47.
- ピナンソッティクン・ポラニー (2014) 「タイ語を母語とする日本語学習者の不同意表明における語用論的特徴」『言語文化と日本語教育』47号, 1-10.